
モノクロ学園

ヒナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロ学園

【Nコード】

N2137I

【作者名】

ヒナ

【あらすじ】

「みんなあ、いきますかあ〜」

「おうっ!!」

この掛け声から全ては始まった。

本当に、この掛け声から全てが始まった訳です。

Vol 1・始まり

「みんなあ、いきますかあ」

「おうっ!!」

この掛け声から全ては始まった。

ここはモノクロ学園。ここの生徒はみなフツウだ。

「奈々莉いっ、おはよ!」

「おはようございます、鈴。」 黒音 鈴。この春、モノクロ学園の三年生になった。

「同じクラスだあ!」

「まあ、嬉しいですね。」

奈々莉は長い髪をなびかせながら言った。

朝っぱらから始業式で校長の話が長い、長い。要点だけを短く話せばいいのに…

……。そんな事を考えてると春風が心地よくなって意識がだんだんなくなってきた。

「黒音 鈴さん!寝ないで下さい。」

と、大声で言われ目をあけると式台には怒った奈々莉がいた。奈々莉は成績優秀

で金持ちでしかも美人だ。

そのため、生徒会長をしている。こういう式で挨拶するのは常識だ。

びっくりして回りをキョロキョロしてると、生徒がすぐに笑い出した。

それから担任の紹介などが終り、昼食の時間になった。

「鈴、今日もやってくれましたね!!」

「だって眠いんだもん」

「だってじゃありませんわっ!!!!」

「そうだぞっ!」

「雄真」

ニツと笑って雄真が立ってた。「ここいいか?」

「うん」

「鈴、すっげー馬鹿っぽかったぜっ!」

「フンツ。雄真に言われたくないもんね」

「ああ??」

「二人とも落ち着いて!それより雄真君は何で来たの?」

「ああゝ実は変な噂を聞いてさあゝゝゝ」

「最近、園内で生徒が消えているらしい。今日までに二人行方不明になっている」

。

「大変だね」

「そんな事言ってる場合か!ここは俺らの出番だろっ!!」

「そうですわね。少し探りを入れて見ますわ!!」

「ありがとう、奈々莉。」

「頑張ってね」

「お前もだよっ！！」

「はう~~~~」

「あ、鈴。今年の一年の入部希望者がいますわ。」

「はう~~~~なら明日くるようにいつて~~~~」

「わかりましたわ。どんな子が入るか楽しみですわあ。」

「だねえ~~~~」

鈴はフツと外を見た。

外は涼しく春風に乗って桜が舞っていた。

Vol 2・仲間

翌日。鈴達は生徒会室にいた。「奈々莉い、まだ一年は来ないの??」

「そうみたいですわね。」

「何人くらいくるんだ?」

「二人くらいかしら……」

三人はソファ―に腰掛た。

「あのおくく篠染先輩はいますかあ??」

「あ、私ですわ。もしかして新入部員ですの?」

「あ………はい!!」

「じゃあ、座ってですわ。」

「はいっ。」

少女は言われるように近くにあつたイスに座つた。

「じゃあ、自己紹介から。」

「えっと……一年の日坂 実衣由です。よろしくお願いします!」

「私は奈々莉。よろしくですわ!こっちは鈴であつちは雄真ですわ。」

「よろしく。」

「ちわっ!」

実衣由は、茶髪で長い髪を横で結び笑顔がかわいらしい子だった。質問をしたりしながら仲良くしていたらドアを叩く音が聞こえた。

「どうぞ。」

「あの………」

「新入部員?入って、入って。」

その少年はイスにちょこんと座つて下を向いた。

「名前は?」

鈴が顔を覗くように見ながら聞いた。

「鳴瀬 啓です……。」

啓は黒髪の可愛い子だった。

簡単に自己紹介をそれぞれした。

「実衣由、どうしたの？」

実衣由は啓をじっと見つめてた。するといきなり叫んだ。

「はぁうゝゝも……萌えつゝゝゝゝゝ！……！！！！！」

みんなはキョトンとした顔で実衣由を見た。

確かに啓は見た目から可愛い。身長も低く、だぼだぼの着慣れない制服を着ている。

実衣由が言うには、そう言った男の子をショタと言らしい。 実

衣由は腐のつく

女子らしくそういうのが好きらしい。

「へえゝゝゝ初めて知ったぁゝ確かに可愛いよねっ！！！」

「あれこそが萌えですよゝ他にもいろいろあるけど……あ、鈴先輩はロリですね

！！カワユスゝゝ」

「えっ！ロリって何？？？教えて！」

「ロリはですね……」

鈴は話を真剣に聞いていた。

それを奈々莉たちはあきれた様子で見っていた。

「じゃあ、一応そろったことだし、本題にはいろうか。」

「本題ってなんですか？」

「それは俺らのグループ名だ！！！」

「そもそもここって何をする部活ですか？」

「それは、警察だな！」

そう、この部活はおもに学園内の事件を解決していく世間で言う警察のような部活だ。

ただし、これは遊びではない。この五人はあらゆる技を使うことが出来る。そして

て学園長に学園を守るために選ばた人なのだ。

「へえ、なんかすごい！」

「で、どうしますの?」

「あゝ何にする？」

「あの……SPってどうですか？」

「ああ、いいかもな！」

「私は水戸黄門がいいですわ♪」

「時代劇かよ……」

「モノクロ5!とかはあ?」

「あ、よくねえ??」

「やっ
たあゝ
！」

「では、本日より私たちはモノクロ5です!!」

頑張るぞぉー
♪♪♪

鈴の一言でモノクロ5に決まった。

ここからが事件の幕開けになるとは誰も知らなかった。

Vol 3・依頼

あれから数日。

これといつて事件とか依頼とか全くなく何事もなく生活していたある日、雄真か

らメールが来た。

後ろを振り向くと雄真がニコツと笑っていた。

何だろうと見てみると、メールには「Dear 鈴 新しい依頼が入った。放課後説明す

るから部員を集める！！ 後、お前のスカートすごいぞっ（笑）

From 雄真」

びっくりしてスカートを見るとキレイにめくれていた。急いで元に戻し雄真を

睨みつける。

雄真はケラケラ笑ってる。

それに腹をたてて思いきり睨み付けてやった。すると、

「わり」

と雄真が頭を下げた。

それから部活の時間になった。

みんながそろったことがわかると雄真は真剣な表情で話始めた。

「実は、最近女子生徒が行方不明になっているんだ。これを見てくれ。」

そういつてパソコンを見せた。そこには学園の女子生徒の写真が掲示されてた。

「これは何ですか？」

「これは行方不明になった三年の咲原 友だ。」

その子は長い黒髪でポニーテールにしている身長は高くモデルのような子だった。

。

「この人、美人ですね。やっぱこんな人がモテるのかあ」

「実衣由、そんな事はいいんだ!!」

「あ~~~~い」

実衣由はのんきな返事を返した。

「まあ、いいじゃん! そういえば友ちゃん、最近学校に来てなかったよね??」

「そういえば見てませんわね」

二人は言いながら頷いた。

「これが事件だ!! 早速捜査開始だあ!!!」

「~~~~お~~~~」

「つても、どうしょつか」

「そうですね。学園内の人かもわかんないですわ。」

「だな、しかも学園内でさらわれた可能性は少ないしな。」

雄真はむうと考え込んだ。

その時

「あの、僕……………この人見ました。」

ふりむくと啓がひよこつと手を挙げていた。

「……………つつどこで!!!」

皆の視線が一気に集められた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2137i/>

モノクロ学園

2010年10月20日15時34分発行